

No.	質問	回答
1	海外に留学に行く人がいるとお聞きしましたが、英語圏に行くことが多いのでしょうか。また海外出稼ぎへはヨーロッパに行くことが多いのでしょうか。	海外留学は奨学金を利用する場合、多くが英語圏（オーストラリア、NZ）になります。そのほかはポルトガル、韓国、香港、日本への奨学金もあるようです。奨学金を使わない自費留学では、やはり圧倒的にインドネシアが多いと思います。出稼ぎは2種類あり、政府間の協力で実現している韓国、オーストラリアへの労働者派遣と、ポルトガルのパスポートを入手（東ティモール人には特例でポルトガル旅券が発給される）してEU圏内に入り、主にイギリスやアイルランドで働く、というものです。前者が人数制限や期限付きなのに比べ後者は期限も制限もなく、すでに拠点を築いたティモール人が親戚を呼び寄せる形で雪だるま式に増えています。
2	教育について追加の質問です。大学や大学院教育を受ける場合、留学先は、インドネシアなのでしょうか、それ以外が選ばれる場合が高いのでしょうか。ポルトガル語の高等教育というかなり行き先が限られるのでは。市井における英語の教育熱みたいなものはなるのでしょうか？	一部上記回答と重複しているので省略します。ポルトガル学校で高校まで学んだ場合、行き先はほぼポルトガルかブラジルに限られます。英語圏での留学チャンスが多いことから英語習得への熱は高いです。フィリピン人が比較的幅の広い価格帯で英語学校を開いており、公立学校に通いながら空いた時間で英語学校に通ったり、最初から認可されている英語学校に子供を入学させる家庭もあります。
3	ワクチンの話の時に「死を受け入れる考えがあるのでわざわざワクチンを打ってまで生きようと考えない人もいる」といったお話がありましたが、東ティモール人の死生観についてももう少し詳しくお話いただくことはできますでしょうか？特に、日本と比較して驚かれた点があればおしえてください。	日本との比較で言うと、死が隣り合わせの生を生きているにもかかわらず刹那的ではない、むしろ、いつ神さまの元に戻されてもいいように生を謳歌している、ということを感じます。亡くなった先祖の魂が、いつも自分たちを見守っているという発想は日本とも共通しています。夢に亡くなった家族が出て来るとなにか胸騒ぎがしたりして、家族中に夢の話をして「どういことだろう」と相談したり、ろうそくとお花をもってお墓参りに行ったりします。東ティモールの人に子どもの数を訪ねると、死産や亡くなった子どももすべて含めて答えます。貧しくともお葬式は親族一同家畜やお金を出し合って盛大に送り出す様子には心を打たれます。
4	出稼ぎ労働による送金は、GDPのどの程度で、その出稼ぎ先や職種等は、どのようなものがメインでしょうか。「ナショナルアイデンティティ」とをどのように捉えられていますか。宗教は、カトリックが多いようですが、土着の信仰など歴史的背景がどのように混ざっていると感じると良いでしょうか。コロナ禍でPHCが見直されていますが、医療の方針としては、その潮流に則るものになりそうでしょうか。	出稼ぎ労働による送金額について正確なデータはありませんが、コーヒーの輸出高が年間4～5千万ドルくらいと思われるので、それ以上です。最近、国際NGOによって実施された調査によると、人口の1割が何かしらの海外送金を受け取っており、そのうちの40%がイギリス、26%が韓国、14%がオーストラリアから、との結果が出ています。職種はイギリスでは食品工場のラインやファストフード店の店員など、韓国では7割が水産業、オーストラリアでは農業が主です。「ナショナルアイデンティティ」についてはジョゼ・ルイスさんに回答いただいたほうがいいと思いますが、お返事をいただけなかったので外国人からみた印象をお伝えします。東ティモールは歴史的に長い苦勞の末に勝利して勝ち取った国家なので、やはりその歴史がアイデンティティの根幹にあると思います。この20年間はその歴史を実体験として共有している世代が主流でしたのでアイデンティティに対する迷いはなかったと思いますが、これから独立後に誕生した世代が中心となるにつれて、アイデンティティの捉え方も変化してくるのではないかと思います。カトリックへの改宗が進んだのは実はインドネシア支配下（1975年以降）で、それ以前は布教活動はなされていたものの多くは洗礼を受けていませんでした。土着信仰が根強い東ティモール社会にカトリックが受け入れられた背景には、この共存期間の長さが関係していると思います。加えて、5宗教（イスラム教、カトリック、プロテスタント、仏教、ヒンドゥー教）のうちいずれかを選択しなければ市民権が得られないインドネシアの支配下で多くがカトリックを選択し、さまざまな人権侵害にカトリック教会が岩として人びとに寄り添いました。東ティモールでカトリック教会は、教義を広めるといって以前に貧しく虐げられた人びとを救う存在であり、その過程で土着信仰の否定ではなく共存を模索したのではないかと思います。PHCとはPositive Health Careのことでしょうか？東ティモールの医療は公衆衛生の普及による予防がこれまでの流れで、治療はかなり後手に回っています。医者にかかると治る病氣も治らない、と信じている人は農村部のみならず首都にもまだ多いと思います。
5	東ティモールでは、農業政策はどうなっていますか。農業生産の規模や、生産者人口は割合として少ないでしょうか。ベトナムでは、地方から出稼ぎに都心へ来たり、海外へ出稼ぎに行った若者が、貨幣は無いけどやはり出身地の暮らしが良いということでも地元に戻り農業する人がいる、と聞いています。ティモールも農業にてこ入れすれば、食糧困難による貧困や、雇用促進がなされ、出稼ぎは少なくなり、地元に住むものではないでしょうか。・・・と、途中まで書いていたら、伊藤さんが、マーケティングのノウハウがない、という話がありましたね。。。 (笑)	東ティモールは人口の7割が農村部に住み、農村人口の7割が農業に従事しています。ほとんどが自給農業で産業としての農業の発展が言われてきましたが、うまくいっていません。ベトナムの例は興味深く、東ティモールでも若者が農業に従事して農村を活性化してくれたら、と思いますが、現状は村に残るのは貧乏くじ、という認識がまだ主流かと思います。
6	↑すみません。観光業はどうか？これからの発展も含めて教えていただきたいです。アジアの中では最貧国という認識ですか？	2011年の戦略的開発計画で、産業多角化の柱として掲げられたのが農業に並んで観光業でした。以降、国際機関も観光業に力を入れ、アメリカのUSAIDが海洋資源の豊かさを武器にした観光支援、ニュージーランド政府がラメラウ山とコーヒーを中心とした観光支援、オーストラリア政府が観光業を担うアクター支援、と観光支援のオンパレードでした。東ティモールと近いオーストラリアからは豪華客船やダイビング客が訪れ、うまくいっていた時期もありましたが、コロナ禍で現在はすべて停滞しています。それでもたとえば新しいレストランやコーヒーショップが若い東ティモール人たちの手によって開かれるなど、観光業を担う人材は育ってきていると感じます。東ティモールはアジアと大洋州の間で、通貨が米ドルであったり、一概にアジアの国々と比較するのは難しいです。